

新潟応用地質研究会の足跡をふり返る

津 田 禾 粒*

昭和37年に新潟応用地質研究会が発足して30年にもなるという。二度にわたる中断はあったものの現在の状況をみて今昔の感にたえない。そもそもこの研究会の始動は当時新潟県庁で現場技術を担当する中山さんら若手の地質屋さんたちによるものである。最初の研究会は37年3月10日に当時の新潟大学理学部の教室で21名の会員が参加して開かれた。ちなみに当時の会員数は39名、年会費は300円であった。

ヨーロッパ諸国では地質と土木・建設の分野の人々との協力関係は古くから盛んであったらしいが、わが国では当時はその模索の時代であった。この研究会の始動は地方の動きとしては画期的な出来事と誇ってよかろう。

その後の30年の歴史をふり返ると、記憶は必ずしも定かではないが二回の中断をはさんで、三期に分けられるであろう。

第一期は昭和37年から41年にかけてであるが研究報告をみると、地すべりや地盤沈下ならびに新潟地震に関する先駆的な注目すべき成果がもられている。いずれも新潟に特有な災害現象を追及したもので、国内のみならず海外にも注目されるものであった。

第二期は昭和48年から53年にかけてである。この間、各分野で活躍する会員の多様の研究発表が行われ、地質・土木その他の分野に共通の視野が拡がり研究会本来の目標が現実のものとなった。とくに48年には186頁に及ぶ海外特集号が生まれ、世界各地で会員が体験した貴重な情報や資料が集約されたことは記念すべきであろう。

第三期は昭和61年から現在に至るが、現在、会員数が289名に達し、各種委員の数だけでも発足時の会員数を上まわる盛況であり、今後会の一層の発展が期待される。

最初の中断は大学紛争が原因であったと思うが、2回目はどうしてなのか思い出せない。第二期のころには新築の教育学部の教室を会場に暖房の切られた土曜の午後、冬は寒さにふるえながら発表を聞き、夕方の懇親会の暖かさにホッとしたことも懐しい。私が研究会に深くかかわったのはこの頃である。有志の皆さんとともに講演者や実地見学地を決め、葉書にガリ版で案内を出したことなど、今となって懐しい。自分でいうのはおかしいが、割合よくやったせいか、規約にない幹事長という称号を与えられたりもした。しかし、不思議なことにこの会には深くかかわってきたと思っていたにしては私の投稿の少ないのにはバック・ナンバーをみて意外である。不勉強のせいであったかと反省している。

新潟応用地質研究会の活動が高く評価され、また機関紙の内容が全国誌の水準を超えているというお世辞つきで、日本応用地質学会に合流し、その支部にとの話もあった。しかし、新潟の研究会としての本来の趣旨を貫くことになったことを記憶する会員も少なくなったことであろう。

最後につきの二点を付記し、会員諸兄の御検討がいただければ幸いである。

* 地質家（前新潟大学学長）、元会長

一つは、今後この会がこれまで以上に地球環境の保全に関して調査研究を重ねられ、現場に生かす技術の開発に努められることである。

いま一つは研究会の名称について一言。これほど多くの分野の専門家によって構成されている研究会を応用地質という一見せまい分野を示す用語のままではよいものだろうか。なにかふさわしい言葉をと考えても急には思いつかない。会員の皆さん考えてみてはどうでしょう。新しいよび名を新潟から日本に、そして世界に示せないものでしょうか。

重ねて本研究会の前途を期待します。